

2014年度心と体の相談センター調査・研究事業
未成年者のお酒に関する調査報告書

2015年3月

島根県立心と体の相談センター

はじめに

お酒は私たちの生活に豊かさと潤いを与えてくれる一方、不適切な飲酒は、高血圧・高脂血症・肥満・糖尿病など身体に深刻な影響を及ぼすとともに、アルコール依存症に伴い家庭や職場、地域をも巻き込んだ様々な問題を引き起こす危険性を高めます。中でも未成年期からの飲酒は心身に与える影響が深刻で、成人に比べてアルコール依存症になりやすいとも言われています。

未成年者の飲酒については、「健康日本21」の中で、未成年者の飲酒をなくすとの目標が立てられております。飲酒予防に向けては、未成年者飲酒禁止法改正や、アルコールの販売側による年齢確認等入手しにくい環境の整備、学校現場における未成年者の飲酒予防にかかる教育、未成年者を取り巻く環境の変化などに伴い、近年では未成年者の飲酒頻度は減少傾向にあると言われております。

一方で、2013年の厚生労働省研究班の全国調査によると、アルコール依存症者は推計で109万人との報告がなされ、10年前の調査結果と比べ、30万人近く増加していることがわかりました。このような状況を踏まえ、2014年6月に、アルコール健康障害対策基本法が施行され、今後アルコール関連問題への対策が、より総合的に推進されていくことが期待されており、本法においては、学校も含め様々な場において、アルコール関連問題の「学習と教育の振興」が基本的施策として挙げられています。

当センターは、アルコール依存症当事者の自助グループである「島根県断酒新生会」と嗜癖問題にかかる専門家の団体である「山陰嗜癖行動研究会」と協力しながら、平成5年度から現在まで約20年間にわたって未成年者へ向けたアルコール関連問題にかかる啓発として、「アルコール関連問題学校セミナー」を開催してきました。これに加え、未成年者の飲酒にかかる状況を把握し、より効果的なアルコール教育や啓発のあり方を検討することを目的として、これまで2004年度、2009年度の2度に渡って、中・高生を対象としてアンケート調査を実施してきました。

そして、今回は3回目の調査となり、調査開始から10年目の節目とも言えます。本調査結果から見えた主な特徴は以下のとおりです。

- 1) 島根県の中・高生の飲酒経験・飲酒頻度・飲酒習慣は全国調査と同様に減少傾向にある。しかし、中学生で既に飲酒経験があるものが約半数いる。
- 2) 飲酒する際に、親や親戚といった身近な大人が関わっている傾向が高く、未成年者の仲間同士で飲酒する機会は減少傾向にある。自動販売機などでの酒類の販売自粛が、未成年者の酒類の入手ルートの遮断につながっている。
- 3) 「ノンアルコール飲料」の急速な普及から約4割の生徒が飲んだことがあると答え、約7割の生徒が飲んでも良いと答えている。
- 4) 学校での学習によるアルコールの害に関する理解が少しずつ高まっている。一方、妊娠中の飲酒が胎児に与える影響などの項目については、まだ正答率が低く、学習効果を高める工夫が必要である。

過去の10年の調査結果の比較も踏まえた今回の調査結果が、未成年者に対する今後のアルコール教育や普及啓発にとって有益なものとなることを願っています。

2015年3月

島根県立心と体の相談センター
所長 小原圭司

目次

I. 調査目的	1
II. 調査概要	1
1. 調査地域	
2. 調査対象	
3. 調査内容	
4. 調査方法	
5. 調査時期	
III. 調査結果	2
1. 飲酒経験率	
2. 初めての飲酒の状況	
3. 飲酒の現状	
4. 飲酒と問題意識	
5. お酒の害についての認識	
IV. 考 察	13
V. 資 料	15
• 調査表	
• 各設問別の回答状況	

I. 調査目的

島根県立心と体の相談センターでは、「未成年者のお酒に関するアンケート調査」を2004年に初めて実施し、その5年後の2009年に2回目の調査を行った。

前回2009年の調査では、飲酒経験のある生徒が中学1年生で47.3%、中学3年生で57.8%、高校2年生で65.9%の割合を占めており、その中で1ヶ月に1回以上飲酒をする生徒の割合が中学1年生で13.6%、中学2年生で20.6%、高校2年生で30.2%という結果が報告されている。

未成年者の飲酒は心身に重大な害を及ぼす危険性があることから、島根県内でも関係機関が様々な機会を通じて未成年者の飲酒予防に取り組んできたが、前調査から5年を経過した現在の中・高生の飲酒に関する実態を把握し、その傾向を知り考察を加えることで今後の未成年者に対する効果的なアルコール教育や啓発のあり方を検討する材料とするため、本調査を実施した。

II. 調査概要

1. 調査地域

島根県全域

2. 調査対象

調査は島根県内の中学1年生 1,188名、中学3年生 1,159名、高校2年生 1,293名に対し実施した。(中学校11校、高等学校10校)

調査対象校は、過去2回のアンケート調査と同一校を対象に実施した。

回答者数は、中学1年生 1,094名、3年生 1,041名、高校2年生 1,204名のうち有効回答者数は、中学1年生 1,088名、中学3年生 1,033名、高校2年生 1,134名であった。

なお、アンケートの有効回答率は89.5%と非常に高い割合であった。

3. 調査内容

中・高生本人の飲酒実態や飲酒行動に関連する要因や環境、またアルコール及びノンアルコール飲料に関する意識と知識等について28個の設問を設定した。回答は準備された選択肢の番号を回答用紙に記入する形式とした。(一部記述式あり)

4. 調査方法

アンケート調査票と回収に必要な封筒を調査対象校に配布し、回答用紙への記入は生徒自身が行い、調査票は記入後封筒に入れて密封した。生徒から回収した封筒は各学校ごとにとりまとめ、心と体の相談センターへ送付された。

5. 調査時期

平成 26 年 9～10 月

Ⅲ. 調査結果 * () 内は 5 年前との比較。－は減少、＋は増加。

1. 飲酒経験率

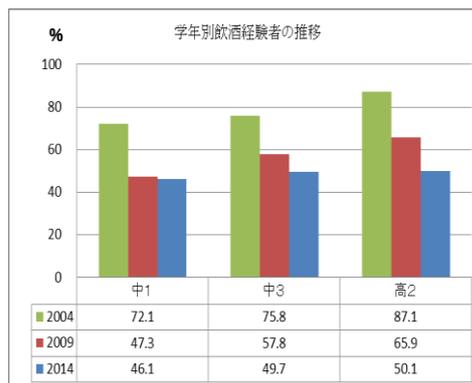
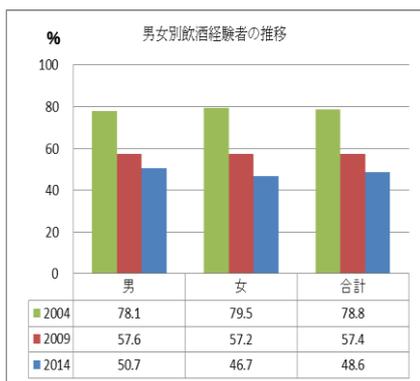
(問 1：お酒(さかずき 1 杯くらいを 1 度でも)を飲んだことがありますか?)

今回の全体の飲酒経験率は 48.6% (－8.8 ポイント) であり、徐々に減少傾向にある。

男女別にみると飲酒経験率は、男子 50.7%、女子 46.7% と男女とも約半数がお酒を飲んだことがあると答えていた。

性別と飲酒経験率には有意差が認められ (p<.05)、男子の方が女子よりも飲酒経験があるものが多い。

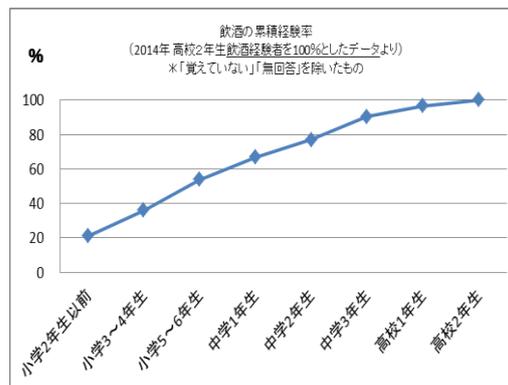
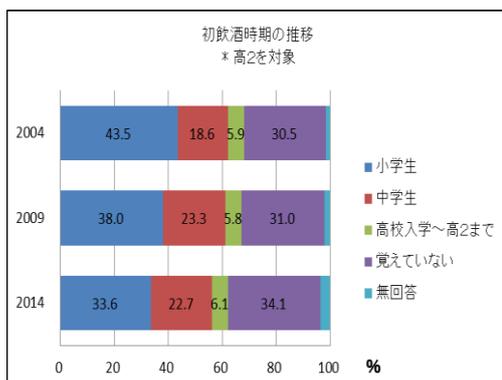
学年別でみると中 1 で 46.1% (－1.2 ポイント)、中 3 で 49.7% (－8.1 ポイント)、高 2 で 50.1% (－15.8 ポイント) であった。5 年前の調査と比較すると飲酒経験率は全学年で低下している。特に中 3、高 2 と年齢が上がるほど低下率が大きくなっている。



2. 初めての飲酒の状況

① 時期 (問 2：初めてお酒を飲んだのはいつですか?)

高校 2 年生の飲酒経験者で、飲酒時期を覚えている者のうち、約半数が小学生の時期に飲酒を経験していた。

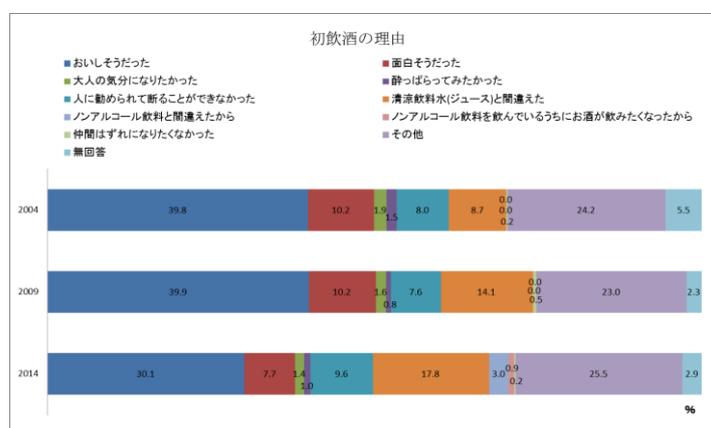


② 初飲酒の理由（問4：初めてお酒を飲んだときの理由は何ですか？）

飲酒経験者のうち、初飲酒の理由は「おいしそうだった」が最も多く、全体で30.1%（-9.8ポイント）であったが、5年前と比べその割合は大きく減少している。

次いで多かったのが「その他」で25.5%（+2.5ポイント）であり、その内容を見ても「お正月だったから」「お神酒だったから」「行事の時だったから」等が多かった。

「ノンアルコール飲料と間違えたから」「ノンアルコール飲料を飲んでいるうちにお酒が飲みたくなったから」のノンアルコール飲料に関する設問に回答した者は全体の約4%程度の少数であったが、ノンアルコール飲料が未成年者の飲酒の機会となっていることがこの結果からわかった。

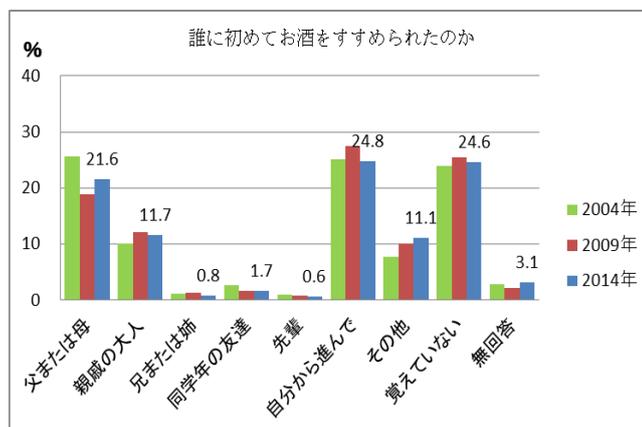


③ 初飲酒をすすめた人との関係

（問3：初めてお酒を飲んだ時、あなたにお酒をすすめた人は誰ですか？）

初飲酒の理由として最も多かったのは「自らすすんで飲んだ」が24.8%（-2.7ポイント）であった。「自らすすんで飲んだ」の場合、中学生においては、どの年代も女子が男子より割合が高かった。

飲酒経験者のうち、初めてのお酒をすすめられた人との関係では、「父または母」（21.6%：+2.7ポイント）や「親戚の大人」（11.7%：-0.5ポイント）等からすすめられる割合が高いことが明らかになった。

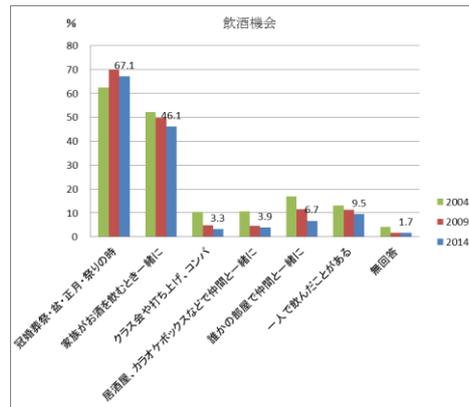


3. 飲酒の現状

① 飲酒の機会（問5：どんな時にお酒を飲んだことがありますか？ ※複数回答）

飲酒経験者の飲酒機会としては「冠婚葬祭、盆、正月、祭り」が最も多く 67.1%、次いで多いのは「家族が飲むときに一緒に」46.1%であった。この順位は10年前、5年前と変わらない。

また他の「誰かの部屋で仲間と一緒に」「クラス会やコンパ」「居酒屋やカラオケボックスで仲間と」の3つの項目については、10年前、5年前と比較して減少しており、未成年者が仲間同士で飲酒する機会は減少していることがうかがわれる。

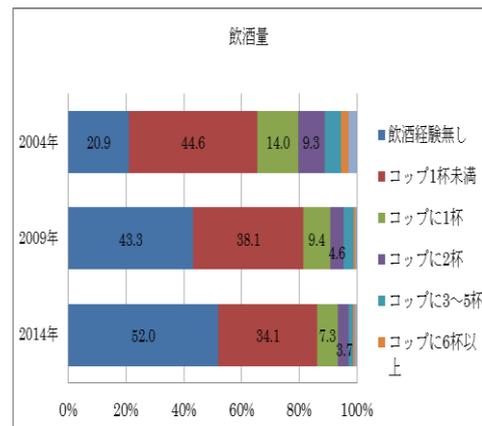
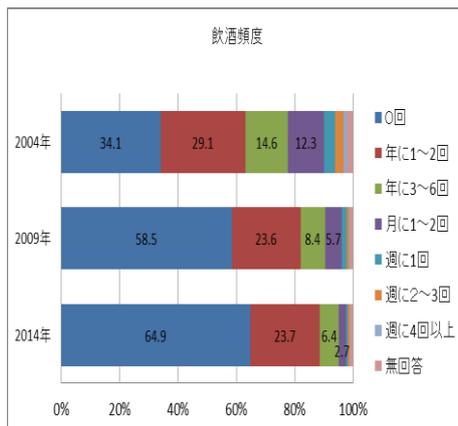


② 飲酒の頻度と量

（頻度：問7 この1年間にどのくらいの頻度でお酒を飲みましたか？）

（量：問9 お酒を飲む時にはどのくらいの量を飲みますか？）

10年前、5年前と比較すると、全体の飲酒頻度と1回あたりの飲酒量がともに大きく減少していることがわかる。

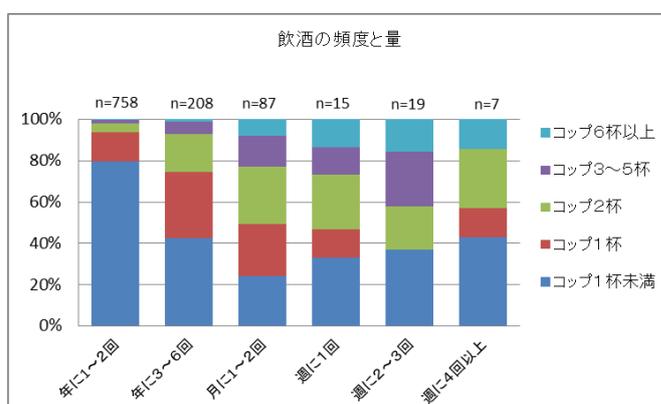


なお、飲酒頻度と1回あたりの飲酒量との関連をみると、頻度と量は比例する傾向がある ($p < .001$)。これは、飲む回数が多くなればなるほど、酔うまでに多くの量が必要になってくるアルコールの耐性の特性とも一致する。

【飲酒頻度と飲酒量の関連】

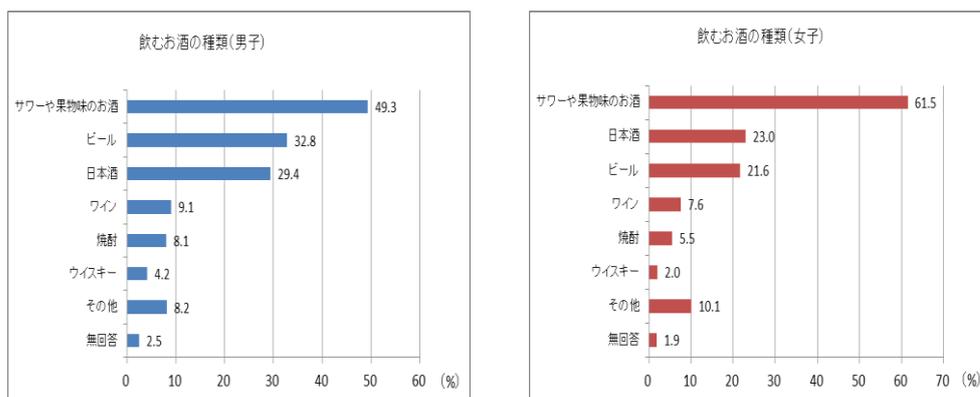
飲酒の頻度と量の関連(※飲酒経験なし、飲酒頻度0回、無回答を除外)

		問7 過去1年間の飲酒頻度						総計
		年に1~2回	年に3~6回	月に1~2回	週に1回	週に2~3回	週に4回以上	
問 9 飲 酒 量	コップ1杯未満	604	88	21	5	7	3	728
	コップ1杯	106	67	22	2	0	1	198
	コップ2杯	33	38	24	4	4	2	105
	コップ3~5杯	13	13	13	2	5	0	46
	コップ6杯以上	2	2	7	2	3	1	17
総計		758	208	87	15	19	7	1094



③ 飲むお酒の種類（問 8：飲むお酒はどんな種類ですか？ ※複数回答）

飲酒経験者の飲むお酒の種類は、全体で「サワーや果物味のお酒」が 55.5%であり最も多く、男子（49.3%）より女子（61.6%）と女子の方がサワー系のものを好んで飲んでいる傾向がある。また、本調査では 10 年前、5 年前と比較して女子ではビールの割合が下がり、日本酒を下回った。

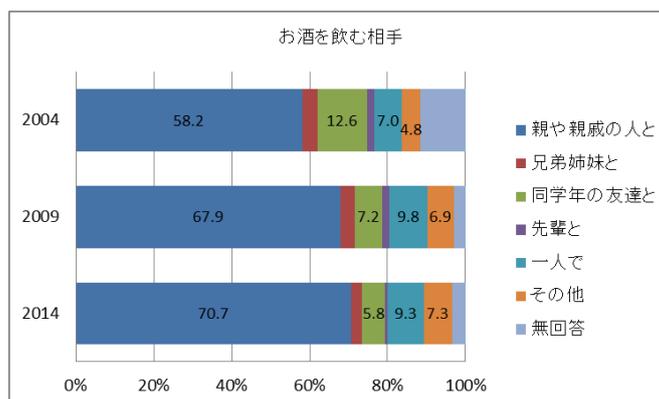


調査年別 よく飲まれるお酒ランキング

	2004 年		2009 年		2014 年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
1位	サワー (51.5%)	サワー (66.9%)	サワー (49.6%)	サワー (69.0%)	サワー (49.3%)	サワー (61.5%)
2位	ビール (47.7%)	ビール (33.4%)	ビール (41.2%)	ビール (28.2%)	ビール (32.8%)	日本酒 (23.0%)
3位	日本酒 (26.8%)	日本酒 (18.7%)	日本酒 (28.3%)	日本酒 (19.0%)	日本酒 (29.4%)	ビール (21.6%)

④ お酒を飲む相手（問 12：誰とよくお酒を飲みますか？）

飲酒経験者のうち約 70.7%が、よく一緒に飲酒する相手として「親や親戚」といった身近な大人を挙げていることが分かった。一方、10 年前、5 年前と比較して、「同学年の友達」や「先輩」といった、未成年者同士での飲酒が占める割合は減少している。

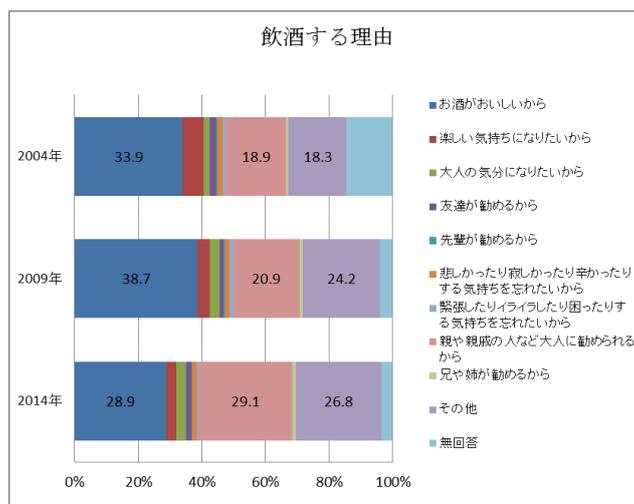


⑤ 飲酒の理由（問 11：主にどんな理由からお酒を飲みますか？）

飲酒経験者の飲酒理由は「親や親戚に勧められる」が 29.1%（+8.2 ポイント）と多くなっており、10 年前、5 年前と比較して増加している。

次いで、ほぼ同数でどの年代も「おいしいから」（28.9%）が多くの割合を占めている。

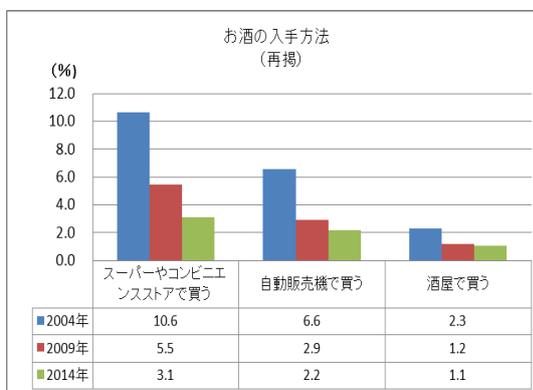
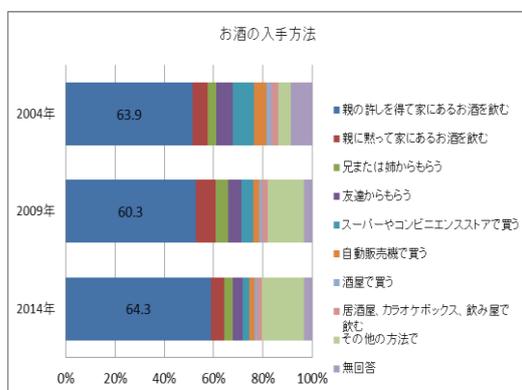
「その他」（26.8%）の理由として「行事（正月、お祝い、儀式等）のため」が 114 人、「間違えて飲んだ」が 60 人回答していたことが特徴であった。



⑤ お酒の入手方法（問 10：お酒をどうやって手に入れますか？）

飲酒経験者のうち、お酒の入手方法は以下の通りで、64.2%（+3.9 ポイント）が親の許しを得て家にあるお酒を飲んでいた。10 年前、5 年前と比較して「家にあるお酒」を飲む傾向が大きくなっている。

また、「スーパーやコンビニエンスストア」「自動販売機」「酒屋」での購入機会が減少していることが特徴である。なお、「その他の方法で」の中で、「行事（正月、お祝い、儀式等）で」を選んだ者が 48 人、「神社で」を選んだ者がそれぞれ 30 人いた。



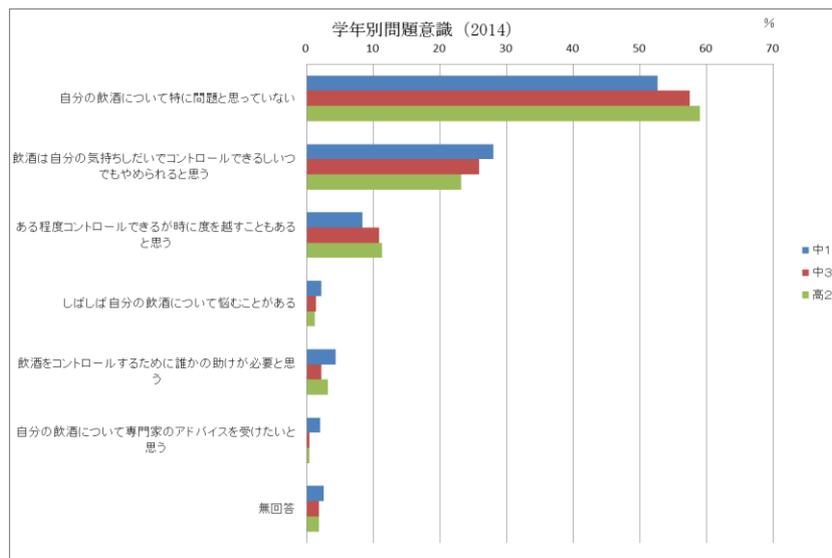
4. 飲酒と問題意識

(問 14：あなたはお酒を飲むことについて、どう思いますか?)

(問 21：あなたは未成年者の飲酒禁止についてどう思いますか?)

(問 26：あなたはお酒を飲むことに興味がありますか?)

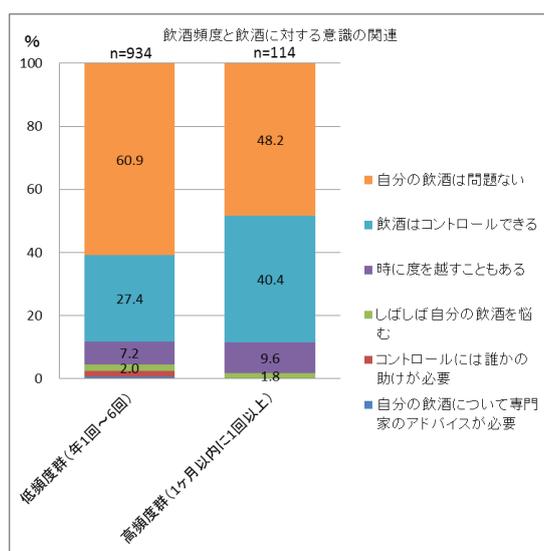
飲酒経験者の飲酒についての問題意識について「特に問題とっていない」(56.3%)「コントロールできるしいつでもやめられる」(25.7%)とする者の割合は合わせて82%であった。



「飲酒の頻度」と「飲酒についての問題意識」の関連をみると、低頻度群（年1回～年6回）では、「問題なし」「コントロールできる」と考えている者が88.3%である一方で、高頻度群（月1回以上）においても、「問題なし」「コントロールできる」と考えている者が88.6%と、ほぼ同程度の割合いることが明らかになった。

クロス集計表 飲酒経験者全体（無回答、飲酒経験なし、飲酒頻度0回を除外、上段は実数、下段は%）

		問7 過去1年間の飲酒頻度						総計
		低頻度群		高頻度群				
		年に1～2回	年に3～6回	月に1～2回	週に1回	週に2～3回	週に4回以上	
問 14 飲 酒 に つ い て ど う 思 う か	自分の飲酒は問題 ない	440	129	34	7	12	2	624
		60.5	62.3	45.3	43.8	60.0	66.7	
	飲酒はコントロール できる	199	57	35	5	5	1	302
		27.4	27.5	46.7	31.3	25.0	33.3	
	時に度を越すことも ある	54	13	5	3	3		78
		7.4	6.3	6.7	18.8	15.0		
	しばしば自分の飲酒 を悩む	14	5	1	1			21
		1.9	2.4	1.3	6.3			
	コントロールには誰 かの助けが必要	16	1					17
		2.2	0.5					
自分の飲酒につ いて専門家のアドバ イスが必要	4	2					6	
	0.6	1.0						
	727	207	75	16	20	3	1,048	
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0		



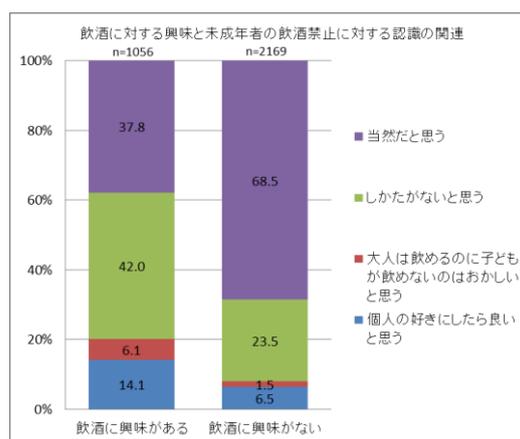
さらに、「飲酒についての興味」と「未成年者への飲酒禁止についての考え方」についての関連をみると、お酒を飲むことに「興味がない」と答えた者では、未成年者の飲酒禁止について「個人の好きにしたら良いと思う」「大人は飲めるのに子どもが飲めないのはおかしいと思う」と答えた者が8%であったのに対し、お酒を飲むことに「興味がある」と答えた者で、同様の回答をしたものは20.2%と高い割合を占めている。

この結果から、飲酒に興味のある者は未成年者の飲酒に対して問題意識が薄い傾向がある (p<.05)。

クロス集計表 (無回答を除外、上段は実数、下段は%)

問26 お酒を飲むことに興味があるか

		ある	ない	総計
問 21 つ い て ど う 思 う か	当然だと思う	399	1,486	1,885
		37.8	68.5	
	しかたがないと思う	444	510	954
		42.0	23.5	
	大人は飲めるのに子どもが飲めないのはおかしいと思う	64	33	97
	6.1	1.5		
個人の好きにしたら良いと思う	149	140	289	
	14.1	6.5		
総計	1,056	2,169	3,225	
	100	100		



5. お酒の害についての認識

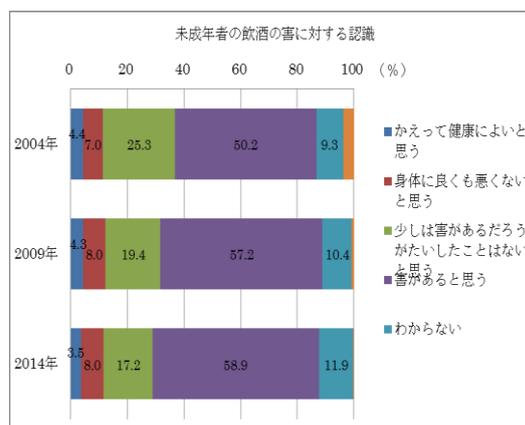
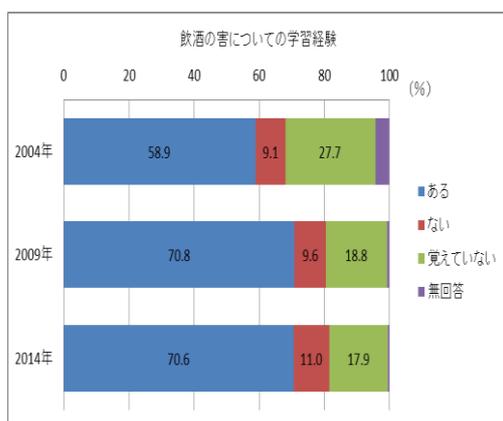
(問 24：お酒が健康に及ぼす影響について学校で学んだことがありますか?)

(問 22：未成年者がお酒を飲むと身体に害があると思いますか?)

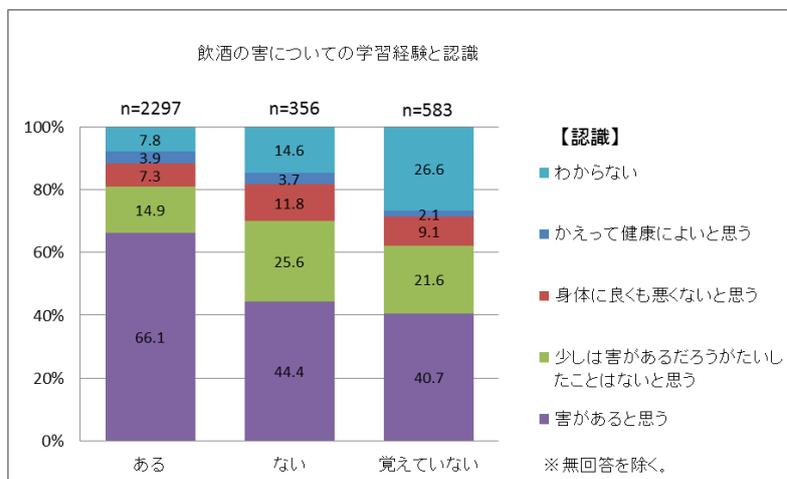
(問 23：お酒をたくさん飲むことと関係があることは? ※複数回答)

お酒が健康に及ぼす影響について、学校での学習経験が「ある」とする者は全体で70%を超えている。

また未成年者の飲酒の害について、「害がある」と思っている者が全体で58.9% (+1.7ポイント)であった。5年前と比較すると、「害がある」とした者は、中1では減少しているものの63.1% (-5.0ポイント)、中3で54.6% (+3.1ポイント)、高2で58.8% (+6.0ポイント)の学年では増加しており、全体的には、未成年者の飲酒は身体に悪い影響があるとの認識を持つ者が増えたことがわかる。



飲酒の害についての学校での学習経験と害に対する認識の関連をみると、学習経験がある者ほど、害への正しい認識を持つ者が多いことが分かった。



また、飲酒の害に関する具体的な知識については、回答の正答率が以下のとおりであった。

妊娠中の飲酒が胎児に与える影響の正答率は、女子においても半数以上が未知であった。

2014年	回答	正答率 (男子、女子)
1位	アルコール依存症になる	71.7% (65.4%、77.7%)
2位	急性アルコール中毒になる	65.8% (60.5%、70.9%)
3位	肝臓の病気になる	49.4% (46.9%、51.7%)
4位	生まれてくる赤ちゃんの障がい	40.0% (33.1%、46.5%)
5位	脳がちぢむ	36.3% (33.7%、38.8%)

6. ノンアルコール飲料についての認識

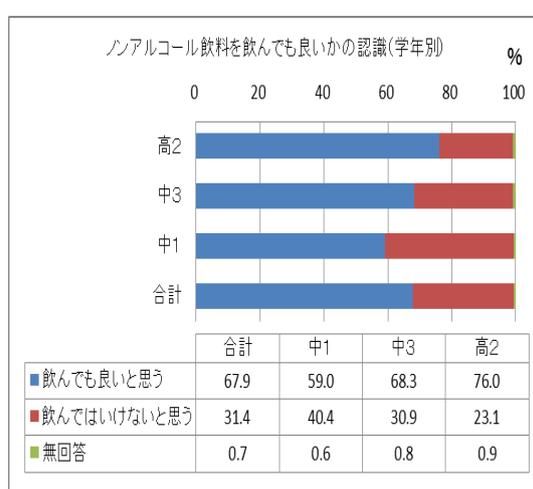
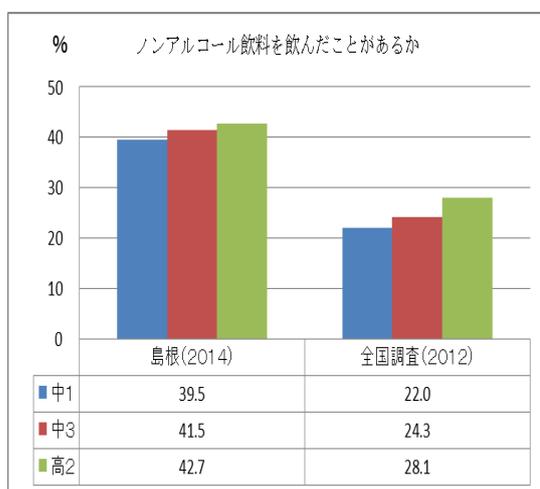
(問 27：ノンアルコール飲料を飲んだことがありますか?)

(問 28：ノンアルコール飲料を飲むことをどう思いますか?)

(問 26：お酒を飲むことに興味がありますか?)

ノンアルコール飲料を飲んだことがある者は、各学年で40%程度もあり、全国調査と比較しても島根県内の飲んだことのある経験率は高い結果となった。ただし、全国調査が2012年実施、島根県の調査が2014年実施と全国調査が2年前であり、この2年間で急速にノンアルコール飲料が普及したことを考えると、この結果だけで本県と全国との経験率を単純に比較することはできない。

また、ノンアルコール飲料を飲むことについて、全体の67.9%が「飲んでも良いと思う」と回答している。



「ノンアルコール飲料を飲んだことがあるか」と「お酒を飲むことに興味があるか」のクロス集計では、「ノンアルコール飲料を飲んだことがある者」が「お酒を飲むことに興味がある」と答えている割合に比べて有意に高く、「ノンアルコール飲料」を飲むことが飲酒への興味との関連があることがわかった ($p < .05$)。

		問27 ノンアルコール飲料を飲んだことがあるか		
		ある	ない	総計
問26	ある	357	237	594
		43.0	18.9	
ことがあ	ない	474	1020	1494
		57.0	81.1	
る興味	総計	831	1257	2088
		100.0	100.0	

		問27 ノンアルコール飲料を飲んだことがあるか		
		ある	ない	総計
問26	ある	275	206	481
		58.6	31.4	
ことがあ	ない	194	451	645
		41.4	68.6	
る興味	総計	469	657	1126
		100.0	100.0	

IV. 考察

1) 飲酒経験、飲酒頻度、飲酒習慣の減少

島根県内における飲酒経験、飲酒頻度は過去2回の本調査（10年前、5年前）と比較して徐々に減少している。月に1日以上飲酒する習慣を持っている飲酒習慣を持つ生徒も減少しており、これらの傾向はH22全国調査（1）及びH22島根県調査（2）とも一致する。

しかし、飲酒経験率が減少してきたとはいえ、依然として中学生の時期に飲酒経験のある生徒は約半数もいる実態であり、未成年者にお酒を飲ませないための対策は今後も必要である。

2) 身近な大人からすすめられるお酒の現状

飲酒機会としては「冠婚葬祭、盆、正月、祭りなどの時」「家族がお酒を飲む時に一緒に飲む」場合が非常に多い。また、飲酒する際の相手としては「父または母」「親戚の人」の割合が非常に高い。その一方、未成年者仲間同士で飲酒する機会は減少している。未成年者の飲酒の場には親、親せきなどの身近な大人が関わっている実態がある。身近な大人への未成年者に対する飲酒予防啓発活動は大きな課題である。

これらの状況は島根県の地域特性を反映しているのではないだろうか。島根県では、古くからの祭りや風習が今なお残っている地域も多く、それらの地域では、冠婚葬祭や盆、正月、祭り等の行事の一環としてお酒が振る舞われ、未成年者が飲酒をすすめられる機会も多い。田舎では風習を重んじ、未成年者のお祭りの時や御神酒などの飲酒については寛容である実態を反映しているのかもしれない。

今後、未成年者の飲酒行動のうち、何が問題飲酒（頻回飲酒、多量飲酒等）につながる因子なのか、さらなる研究が望まれるところである。

また未成年者の飲酒予防に関する明るい材料の一つとして、未成年者のお酒の入手が以前は自動販売機等から比較的容易だったのが、近年、自動販売機での酒類販売の自粛、コンビニ、酒屋等での年齢確認の徹底がされてきた。この取り組みが功を奏し、それらのルートからの入手は確実に減少してきている実態もわかった。お酒から未成年者を守る酒販組合等の取り組みに感謝したい。

3) ノンアルコール飲料の急速な普及

ビールや酎ハイなど「フリー」「ノンアル」などといったキャッチコピーで、ノンアルコール飲料が近年急速に普及している。見かけは本物のビールとほとんど見分けのつかないものもある。

本調査でも初めて「ノンアルコール飲料」にかかる質問項目を追加したが、約4割もの生徒が「飲んだことがある」と答え、約7割の生徒が「ノンアルコール飲料なら飲んでも良い」と答えている実態があった。ノンアルコール飲料は酒ではないため、未成年者が飲んでも法的には問題ないものの、本物のビールなどと間違えて飲んだり、

ノンアルコール飲料を飲んだことをきっかけに、本物のお酒への興味が高まるという生徒もおり（いわゆる「ゲートウェイ効果」）、未成年者へのノンアルコール飲料の対応は今後の課題である。

4) お酒の害に関する学校での学習

各学校でお酒の害に関する学習の機会が設けられており、その学習について学んだことがあると回答したものは7割を超えている。未成年者の飲酒の害に対する意識も約6割が身体に害があると認識しており、少しずつ効果的な学習の機会が設けられ、認識も徐々に深まっているものと窺える。お酒をたくさん飲むと「アルコール依存症になる」などの理解は浸透しているが、「生まれてくる赤ちゃんの障がい」や「脳がちぢむ」など、まだ理解の低い項目もあった。「生まれてくる赤ちゃんの障がい」については女性の方が正しい認識を持つ割合が高いが、半数以上が理解していない状況もあり、引き続きアルコールの害に対する正しい認識の普及啓発に努めていかなければならない。

当センターでも「アルコール関連問題学校セミナー」を通じて、授業などの限られた時間の中でどう効果的に、アルコールの害や怖さ、心身の発達途上にある未成年者の飲酒が悪影響を及ぼすことなどを理解してもらうよう取り組んできた。

本調査結果や学校セミナーなどの資料を活用していただき、少しでも効果的な予防教育の一助となれば幸いである。

謝辞

最後に、本調査の実施にあたりアンケート実施にご協力いただいた県内21校の生徒の皆様、先生方、教育庁保健体育課の皆様、中学校長会長様、高等学校長会長様、各教育事務所様、各市町村教育委員会様、調査の分析にご協力いただきました島根県保健環境科学研究所様、障がい福祉課様、アンケート全般にご助言をいただきました島根県断酒新生会様、山陰嗜癮行動研究会様に深くお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 1) 全国調査…厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）H22 - 循環器等(生習) - 指定 - 020 「未成年者の喫煙・飲酒状況に関する実態調査研究」研究代表者 大井田隆
- 2) 島根県調査…「未成年者の喫煙防止等についての調査」H22 島根県健康福祉部健康推進課

未成年者のお酒に関する調査報告書
発行 2015年3月
島根県立心と体の相談センター
松江市東津田町1741-3